

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
April 2024

No.45

【特集】Future :

子どもたちの安全な暮らしと豊かな未来

トヨタ財団設立50周年にあたり、本誌JOINTの特集第1弾は、未来を担う子どもたちにとっての社会の多様なあり方がテーマ。多分野で活動されている方々の熱い語りをお届けします。



ト ヨタ財団は、1974年にトヨタ自動車工業株式会社およびトヨタ自動車販売株式会社（後に合併してトヨタ自動車株式会社）からの出捐を受けて設立されました。今年で設立50年を迎えます。

試みに50年前の1974年、財団が設立された頃の日本の状況はどのようなものだったのかを調べてみると、興味深い事実が気づきます。前年に起きたオイル・ショックの影響で、この年、日本の物価は23%上昇し、「狂乱物価」という語が生まれました。第二次ベビー・ブームが続ぎ、7月に開かれた「第一回日本人口会議」では、人口の増えすぎを危惧して「子どもは二人まで」という趣旨の大会宣言を採択しています。物価を下げることで人口を減らすことが当時の急務な課題だったのです。

物価を上げることと子どもの数を増やすことに政府が躍起となつている現在の状況とはおよそ対照的です。社会の状況が50年でも変化することには驚きを覚えます。

あ らためて記すまでもありませんが、トヨタ財団はこの50年間、生活・自然環境、社会福祉、教育文化等の多領域にわたつて時代の要請に対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対して助成を行なってきました。

時代が進むにつれてその要請は変化しますから、助成プログラムの構成と内容は不断に見直さねばなりません。今年度、

アジア諸国と日本の関係はおおむね友好的です。この間トヨタ財団は、東南アジア諸国の組織や研究者をはじめさまざまな立場の人々への支援を継続的に行ってきました。微力ながらも関係好転のために一役買ったのではないかと自負しています。近年になって東南アジア諸国が急速な経済成長を遂げ、日本との関係の内実が大きく変容しました。この変化を踏まえ、相互協力の一層の深化に向けて、民間助成財団の役割にも光を当てながら、意見交換ができればと思います。

50周年特設ウェブサイトでは、トヨタ財団の今後に向けての提言を紹介するとともに、過去の助成対象プロジェクトが現在どのように発展しているのかについて、いくつかの具体例を

2024年度によせて



公益財団法人 トヨタ財団理事長
羽田 正

新たな特定プログラム「人口減少と日本社会」を立ち上げるのは、そのためです。どのような見方をとるにせよ、これが現代日本において真剣に考えるべき重要課題であることは間違いありません。これまでの施策や取り組みについての丁寧な調査と適切な評価に基づいた斬新で魅力的な計画や提案が数多く寄せられることを願っています。

財 団創立50周年を記念して、今年度は、通常の助成プログラムに加えて、記念助成と国際シンポジウムを行ない、50周年特設ウェブサイトを開設します。

記念助成は、「50年後の人間社会を展望する」がテーマです。50年後の人間社会の姿はどのようなものになるのでしょうか。月並みですが、平和で人々が幸せに暮らせる世界であってほしいものです。地球環境や国際情勢の変化、技術

革新、人口変動、あるいは新たな価値の発見や創造などさまざまな視角から未来の人間社会のあり方に迫る研究プロジェクトの提案を世界中から募ります。独創的で社会的にインパクトのある多彩なビジョンやシナリオが届くことを期待しています。

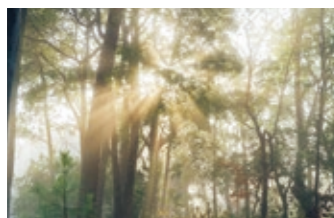
国際シンポジウムのテーマは、東南アジア諸国と日本の関係です。トヨタ財団が設立された1974年に田中角栄首相が東南アジア諸国を訪問しています。この時各地で激しい反日デモが発生しました。日本の企業による利潤追求型の急激な経済進出が、現地の人々の反感を買っていたのです。50年後の現在、東南ア

ご報告します。同時に、トヨタ財団の50年の歩みの一端を、写真等を用いながらビジュアルにご紹介します。

いずれも、過去の単純な回顧に終わらず、「次のトヨタ財団」を展望する未来志向の記念事業となりますので、ご期待下さい。

未 尾となりますが、設立時の出捐以来、多くのご支援をいただいているトヨタ自動車株式会社、各種助成への応募者と助成対象者の皆様、それに財団の活動のさまざまな場面でご支援、ご協力をいただいている数多くの方々に深くお礼を申し上げます。次の50年に向けて、引き続きご指導とご鞭撻をいただければ幸いです。

April 2024
No.45



奈良県王寺町・上牧町にひろがる「陽楽の森」は、国内助成プログラム助成対象者の谷茂則さんの活動地であり、イベントの開催やさまざまな活動を通して、多くの人がつながる場です。2023年には環境省の自然共生サイトにも認定されました。(16ページ参照)。

Presented by Tani Shigenori

CONTENTS

FIRST WORD ● 羽田 正
2024年度によせて 2

【特集】Future

助成対象者鼎談：子どもたちの安全な暮らしと豊かな未来
生活動線のあるところに知識や眼差しを散りばめる 4
綿村英一郎 × 家子直幸 × 齋 典道

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿
研究助成プログラム ● 松山聖央
ヒトとモノの「つながり」としての承認をめぐる 12

国際助成プログラム ● 山本博之
作品制作を通じて国境を越えた相互理解を図る 14

国内助成プログラム ● 谷 茂則
陽楽の森で生み出される新たな価値と世界的潮流 16

特定課題
2023年度プロジェクト一覧 18

「私」のまなざし ● 宮本 聡
アート活動を通じて顔の見える関係を紡ぐ ... 20

活動地へおじゃまします！〈北海道江別市を訪ねて〉 ● 武藤良太
しゃべって、演じて、近くなる 22

2024年度 事業計画 26

【助成対象者鼎談】子どもたちの安全な暮らしと豊かな未来

生活動線のあるところに 知識や眼差しを散りばめる



Watamura Eiichiro

綿村英一郎

Ieko Naoyuki

家子直幸

Sai Yoshimichi

齋典道

司会◎加藤慶子（プログラムオフィサー）

齋典道 私は認定NPO法人PIECESで理事と事務局長をしており、7年ほど前の設立当初から関わっています。NPOの立ち上げに至るきっかけですが、大学時代に社会福祉士の現場実習で児童養護施設に行く機会がありました。最初の2日間は仲良く遊んでいた子が、3日目に急に罵倒してきたり、不意に飛び蹴りが飛んできたり、中学生の子が小学校低学年の子の首を突然締め始めるといったような日常があるのを目の当たりにしました。それらはおそらく、大人や他者への信頼感が希薄な彼らなりに人との関係性を築くための術としてやっていることですが、それらを通じて子どもたちが負っている傷の深さに触れたときに、社会としてこの傷を負わせてはいけないと思いました。

この子どもたちがこのような傷を負う前に、もっと地域の中でできることはなかったのか、という強い想いを持ったところが出発点になっています。

NPO設立当初まず自分たちがフォーカスしようと思ったのは、直接的な支援や場づくりよりも「人づくり」という観点でした。なぜかというところ、子ども食堂に代表されるような子どもを支える場所というのは地域に生まれてきていたり、相談窓口や機関も増え始めていました。ですが、場所や窓口ができて、そこで子どもたちが安心を感じたり、信頼を感じるの結局は人に対してなんだらうとの

活動の出発点

【特集】

Future

子どもたちの安全な暮らしと豊かな未来

広報誌「JOINT」の今年度の特集テーマは「Future」です。“未来志向”という視点のもと小テーマを設定し、それに関連するプロジェクトを行っている助成対象者の方々にお話をうかがいます。第1回目は「子どもたちの安全な暮らしと豊かな未来」をテーマに鼎談を行いました。

今日の日本社会において、子どもの孤立、児童虐待など子どもにまつわる深刻な社会的課題はいまだ山積しており、早急な対応が求められています。本鼎談では、3名の助成対象者にお集まりいただき、活動を始めたきっかけや問題意識、現在の取り組みや展望についてお話をいただきました。実践者、研究者、行政関係者という立場の違いにより、プロジェクト内容や、課題へのアプローチ、アウトプットの方法は違えども、子どもたちの未来を守りたいという共通の目標にむけて議論を進めるうちに、3名の想いはしなやかに交じり合います。専門家による知見やノウハウが市民に伝わり、住民一人ひとりの温かい眼差しで地域の子どもたちを見守るような社会の実現のためにはどうすればよいのか。子どもたちが安心して心豊かに暮らせる未来に向けた手がかりを探ります。

想いからです。また、各地の多様な取り組みに触れる中で、もちろん素敵な取り組みがたくさんありながらも、子どもの権利や尊厳があまり大切にされていない部分が想像以上に多くあることにも気づきました。そうなるとその人の眼差しや姿勢、または価値観のようなものがどう子どもに届いていくのかというところも大事にしていく必要があると考えました。

そのような問題意識を背景にスタートしたのが、「Citizenship for Children (ForC)」という市民向けのプログラムです。権利や尊厳への理解が根底にはありますが、特別なスキルや専門性の獲得は志向せず、核はあくまでも市民性の探求です。もう少し市民それぞれが一市民として、何をするでもなく子どもたちとともにいる中で、自分自身の価値観と目の前の子どもにとって大切なことを内省しながら関わりを続けられる。そういう人が増えていくようにこのプログラムを始めたのがNPOの設立のタイミングでした。

私たちの課題感としては「孤立」というものがあります。いかに子どもたちが周りの人を頼ることができるか。「助けて」あるいは「ねえねえ聞いて」という一言を言える相手がいるか。その関係をまちの中にどう作っていくのかが重要だと思っています。本当にしんどくなつてから誰かに発見されるのではなく、子どもたちが日常を生きている中で、あの人がだつたらちよつと話ができるとか、あの人がいる時間は自分がほつとできる、というような人が地域にたくさんいる風景が広がると、何かとコストがかかる社会に変容していくと。

実は公務員を4年間ほど経験していて、その時に福祉関係の仕事で児童養護施設に行つたことがあります。夕食の時間に私の隣に2歳くらいの小さな子どもが屈託なく笑つて座っていたのを見て、「こんなに小さな子がなぜここにいるんですか」と施設長さんに聞いた。「虐待です」と言われたことがありました。そのことがずつと心に引つかかっていたのですが、研究をしながら社会的正義を考えていたときに、児童虐待に結びつきました。児童虐待を防ぐにはどうしたらいいかということを考え始めたのが、ちょうどトヨタ財団の申請書を書く1年ほど前からでした。

私は斎さんみたいに社会に働きかけていく術を持っているわけではないですし、論文を書くことが仕事の研究者としては、そのようなことは評価されにくい。研究者として何が

ていくといいなと思いつながら活動しています。

ForCプログラムを続けているうちに、自分の地域でもやってみたいという声をいくついかただくようになってきて、モデル的にForC in 奈良、三戸というのをやり始めて、いろいろな可能性が少しずつ見えてきたと感じているところです。7年間の実践の中で、プログラムを通じて人がどう変容していくのか。また、変容を促すためにはどのようなプログラムデザインが必要か。市民が市民として子どもと関わっていくための学びの機会をどのように作っていくとみんなが内省と対話を進められるのか、といったようなことは見えてきたので、これを自分たちで広げようというよりは、いろいろな団体や機関と協力しながら横展開させていくことを助成プロジェクトで行っています。

私たちにはプログラムの知はありますが、それを広げる方法がなかったもので、市民性と呼んでいるこのエッセンスをいろいろな団体や機関と協働して広げながら、子どもともいられる市民の人たちを増やしていく、というようなことをしていきたいと思っています。

できるのかと考えた結果、自分の得意な社会心理学や心理学の知識をいかして、今の社会の正義観や児童虐待に対する人々の視点を客観的に明らかにして、今の状態は実はこういうことになるんだよということを公開して、周知すべきだと思いました。

私の場合は研究からスタートして、「私たちは、実際にはこのような心理に陥っているかもしれないよ」ということを客観的に明らかにして、それを周知することで状況に気づいてもらい、できることをやってほしいという方向に持っていきたいと思っています。そのため何をやろうかということですが、今メインでやっているのが、コミックの制作です。

論文を書くかと思つたのですが、一般の人はほとんど論文を読みません。広く多くの市民の方にどう届けるかを考えたときに、スマホで簡単に読めるコミックがあったら手軽に接してもらえると思ひ、私はストーリーを作

り、なかはらかせ先生というプロの漫画家をお願いして絵を描いていただきます。まもなく公開する予定で、オンラインで公開しようと思つています。児童相談所の人たちがどんなふうに関わっていて、どこに難しい問題を抱えているのか、根本的に難しい



◎ 齋 典道(さい・よしみち)
大学在学中より国内外の社会的養護、地域子育て支援の現場でフィールドワークを実施。2012年には北欧の社会福祉を学ぶためデンマークに1年間滞在。日本福祉大学大学院在学中に児童精神科医の小澤いぶぎと出会い、PIECES設立に参画。現在は、事務局長として、事業・組織の両側面から事業運営に携わる。2015年～2019年まで、都内でスクールソーシャルワーカーを兼務。2022年度 国内助成プログラム助成対象者。

綿村 私は、もともと法律と「正義」の心理学にとっても興味があつて、そこからこの研究にたどり着きました。簡単に要約すると、社会的正義を一番損なうことは何だろうと考える結果、児童虐待ではないかと思ひ至つたということでした。

海外も含めていくつもの研究があるので調べてみたところ、児童虐待や動物虐待もそうですが、本来保護されるべき抵抗できないものが、保護すべきものによって攻撃されるというのが著しく社会的な正義を損なうということが示されています。では、社会的な正義が損なわれるとどういう社会になるのかと考えると、一言でいうとコストがかかる社会になります。正義がないのでルールを作らないといけなくなつたり、監視員がいらないといけない、または監視カメラをつける必要があるような社会になってしまう。信用できる社会であれば任せられることが任せられなくなる

問題だから児童相談所に任せきりにするのはなく、もう少し社会のみんなで考えたほうがいいのではないかと、コミックの力でわかりやすく伝えていけたらと思ひています。

それから、先ほど子どもの孤立とおつしやっていました。家族の孤立、親も含めての孤立ということも考えています。虐待する親は孤独であるということがいろいろ調査で明らかになっているので、子どもとセツトで親の孤立ということにも社会の人に気づいてもらつて、何がそのサインなのかということもコミックで周知させていければと思ひています。

市民の活動が必要になるべき

齋 「孤立」に関してもまさに家族と子どもは同じです。先ほどのお話にあつた2歳とか小さな子どもたちが、虐待されているから助けてと自分から声を上げられるかというところ、それは難しいです。加えて、しんどさを抱える保護者もそのことを周囲に伝えられず、声も上げにくい。その背景には、この辛さを社会が受け止めてくれるかということに対する不安や信頼のなさもあると思ひています。

以前、福祉先進国と言われるデンマークの制度やサービスがどれだけ豊かで充実しているのかを一年かけて学びに行ったのですが、制度という点では日本でも今ある制度をきちんと使えば、それほど大きな差はなくなるだろうという感覚で帰つてきました。ただ、



◎ 綿村英一郎(わたむら・えいいちろう)
大阪大学人間科学研究科・准教授。東京大学卒、同大学院修了(心理学博士)。慶応義塾大学研究員、東京大学助教を経て2017年から現職。2018年に患った高次脳機能障害から回復中。専門は法と心理学、社会心理学。少年司法、AI裁判、虐待、死刑制度など司法の正義に関するテーマを中心に研究している。趣味はコミック、お香、一人旅。2022年度研究助成プログラム助成対象者。

日常を作っている市民の人たちの眼差しは大きく違っていました。とても寒い冬の朝、通勤ラッシュの時間にバス停にやっとバスが来たのですが、もうそのバス停からは乗れないほど満員で到着しました。でも、ベビーカーを押しているお母さんと子どもがバス停にいるのを見た乗客のうち、そのバス停で降りるわけではなかった人たちが3人くらい降りてきて、お母さんに向かって自分たちは後で行けるから先に乗っていいよ、子どももいて寒いでしょと入れ替わりを申し出て、お母さんと子どもがありがとうと言って乗っていくということがありました。

その3人の行為には当然感心したのですが、日本だったらもしそういうことがあっても、「すみませんいいです、大丈夫です」と過剰に恐縮したり遠慮したりしてしまうと思うのです。しかし、降りてきた人たちのお母さんと子どもに対する眼差しと、さらっとあたりがとうと言つて乗っていくお母さんの自然な姿を見た時に、お母さんからしたら自分はこのにいてもいいんだという感覚や、何かあったときに社会の誰かが助けてくれるという信頼感がこういう中で少しずつ育まれているんだらうなと感じました。これは制度をいかに充実させられたとしてもそれだけではきつとうまくいかない。市民一人ひとりの眼差しや価値観といった市民性の部分がセットで育まれていかないといけないんだらうな、これが福祉先進国といわれる所以なんだなと思つた場面でした。

綿村 全くその通りですね。デフォルトを少しと言つてもどのあたりの話をしているか整理が必要とすることがあります。

また、行政、研究機関、地域コミュニティなど複数のセクターが円滑に協働できるとよいのですが、そもそもセクターによつて役割も考え方も視点も違っています。公務員としては研究知見や調査結果が明日にでも欲しいという状況になりがちで、研究者としては5年先に成果を示すための研究をしており連携が難しい、といったような時間感覚や役割の違いがあります。同じ虐待防止という目的に向かつていても、いろいろな違いのある多様なセクターが関わるので、うまく繋がっていくための工夫が必要ではないかと思えます。そうしたときに、エビデンスや研究知見に関する情報をわかりやすく咀嚼して伝えるのが知識仲介だと言われています。

綿村 具体的には、特にどの部分にエビデンスベースの実践が必要だと思われているのでしょうか。

家子 介入研究は世界的にみると多くの蓄積があつて、そうした知見がより一般的に用いられるようになると思つていて、高い効果が実証されている専門家による集中的なケアが必要なきもありますが、多くの人があまりコストをかけずに広範囲に導入できるようなアプローチを非営利セクターが担うのも同時に重要だと思つていて、それがコミュニティや市民社会といった、お2人と共通のキーワードに繋がっているところです。

専門家のいる場所まで通つて指導を受けて

し良い方向に変えていかないといいけないですよね。ハード面だけを変えても思つたほど良い方向には機能しません。良い設計の制度があつても、それをどう運用するのかといったときに、市民の力が必要になってくると思えます。それは本来私たち社会心理学の分野がやるべきだったのですが、個人はやれてきていかなかったということが反省としてあるので、今取り組んでいるところです。

日常の中のデザイン

家子 私は知識仲介の研究をしていて、2019年にトヨタ財団の研究助成をいただきました。大学生のころは企業がビジネスを通じて価値を創出することで社会を良くできると学んでいたこともあり、大学卒業後は医療系のメーカーに入社しましたが、実際はそれの実現が簡単ではないこと、企業が単独で実現できるものではないことを働き始めて実感するようになりました。その後、民間のシンクタンクに10年以上勤務し、その後半には大学の研究所にも兼務するようになり、そうした時期にトヨタ財団の助成金をいただきました。民間シンクタンクでは官公庁からの受託による調査研究も担当していたので、当時から行政との関わりがあつたのですが、約1年半前に転職して公務員として働いています。

シンクタンク勤務時代に社会的養護を経験した若者にインタビューをしに行つたとき、「わかる、なんて言うのは泥水をすすつてからにして」と言われたことがありました。共

帰るというアプローチだけだと、予約を取つてその時間に行くという一連の流れに対応できる人でなければケアを受けられなくなるので、ハードルが高く感じる人もいるんじゃないでしょうか。先ほどご紹介いただいたコミックのような、多くの人の目につくものは、気軽さが全然違うところが特によいと思えます。そういうデザインというか、日常生活の流れの中に自然と馴染むアプローチを使わなると、社会実装はうまくいかないんだらうなと思えました。

ケアしようとしすぎないこと

齋 非営利の児童福祉の領域ではみんな子どものためにと言いがらやつてはいるものの、子どものためになつていないことが実はたくさんあるように思います。本当の意味で子どものためになるかどうかを見極めるのはとても難しいことですが、ここはみんな最低限抑えておこうよというポイントのようなものがまだ抑えられてない感じがあるので、家子さんの取り組みは全面的に応援したいです。

と言つておきながら反対側の話もしますが、「正しさ」を求めることが市民にとって必要なことなのかという問いもあると思つてます。専門職の人たちはそ

有する経験があるわけでもないのに話を本当に理解できることなんてない、わかつたようでわかつていない、ということを突きつけられたのだと思ひハツとした経験がありました。

私も北欧、特にフィンランドの取り組みに関心を持っています。オーブンダイアログに象徴されるような当事者中心のケアが児童福祉にも展開されていて、日本国内でも類似の方向性の改革が行われようとしています。本人がこうしたいと考えているとか、こんなふうに世界をとらえている、といった主観的なことからケアが組み立てられていくといいのだからと思えます。未来がそんな社会になつていくとしたら、個人の努力だけでは実現できないことでも、先ほどのお話にあつたChocのような子どもの周りにいる市民のネットワークや、地域やコミュニティといった単位だからこそできることもあると思うので、児童虐待を防止するための取り組みを社会に実装することを考えたとき、非営利セクターの取り組みに関心を持って、そうした観点で研究をしてきました。

私の知識仲介についての研究の問いは、非営利セクターの対人援助でエビデンスに基づく実践が定着しないのはなぜか、というものなのですが、そもそも知識仲介とは何か、というところから説明させていただきたい。たとえば虐待防止の領域の取り組みと言つても結構幅があつて、広い層を対象とした未然防止としての一次予防から重度化や再発を防ぐための三次予防までと言われている、虐待防

の専門性をきちんと磨き続けていく必要があると思いますし、エビデンスに基づく正しい実践が求められます。一方で、子どもたちが正しい関わりやアセスメントのようなことを求めているかという、そうではないこともままあるように思います。頭で導き出した正しい答えよりも、心を大事にした優しい応えというのものもあるかなと。

この話を背景には、非営利の世界の一部で起きている市民の支援者化、もしくは非専門職の専門職化という問題意識があります。市民として関わっているからこそ意味があるのに、支援者のような振る舞いをしてしまふ。ケアしようとしすぎないでほしいというか、そこにただ一緒にいてご飯を食べたりゲームをして共に過ごす時間や、感情を共有していること自体が大事なことで、心のしんどい部分に変に入つていつたりして、支援者めいたことをしてはいけないんだよということこ



●家子直幸(いえこ・なおゆき)

大学卒業後、医療系メーカー、民間シンクタンク、大学のプロジェクト研究所を経て、現在は公務員。知識仲介のあり方を研究しており、社会福祉法人やNPO法人などの非営利セクターがエビデンスに基づく実践に取り組むための実装方法を模索している。2019年度研究助成プログラム助成対象者。

ろがあります。ベースとして抑えるべきところとの折り合いのつけ方が難しいですが、ここは大事にしたいところです。

家子 研究者の場合は、社会に働きかけるアクションをすると市民の人たちと接点ができたりするものなんですか。たとえばコミックを通じて読者とながるようなことは……。

綿村 研究を進める中で児童相談所の人から一緒に何かやろうというお話をいただくこともありますし、なかにはすごく辛辣なご意見をいただくこともある。自分の目的とすることや実践が共有されているとは限らないし、ある種の価値の押し付けになっているかもしれないと感じて、これでいいのかと非常に悩みます。たとえば研究の中で、児童相談所とはこういうところであるという視点はどうしても出してしまうことになるので、押し付けたくないけれどニュートラルではない状態になってしまいます。

コミックのセリフは私が考えているのですが、こういう言い方をするとこういう価値観の押し付けになるといったようなことを常に考えて、かなり気をつけています。たとえば「児童養護施設ができることに地元住民はすごくリスクを感じる」というセリフが出てくるのですが、それを書いていいのかどうか。インタビューをしたり実証的な研究の結果、児童養護施設が地域にできることに對して住民があまりよく思わないというのは事実です。しかし、それをそのままコミックにしてしまうと、児童養護施設は良くない施設だという価値観を入れてしまうことになります。

し、子どもにとって1人でいる時間もすごく大事だったりするので、孤独を問題だとしすぎないこと。1人の時間もまた豊かな時間として大事にしながら、望まないのに孤独にさせられてしまっているとか、孤立した状況にさせられてしまっているならば、そこにはみんな目配りしていこうという話も、伝えるのがなかなか難しいです。

家子 東京の下町にある酒屋で角打ちを営営する傍ら、そこでソーシャルワーカーとして地域の相談を聞く取り組みをしている保護司の方がいます。地域の側からすると、たまたま酒屋の店主が保護司でソーシャルワーカーだった、ということになるのですが、そういう人たちの取り組みは、無関心の人にとっても近いところに存在していますよね。無関心にどうアプローチするんだろうと考えたときに、専門的なシステムは対極に近いほうになりやすいのだと思います。包括的なその人に関わるというよりも、生活するうえで課題がある人に関わることが専門的なシステムに求められがちの中で、その人となりをおわかった上で関わるができるのは市民であり、非営利セクターなんだと思います。

綿村さんは、各話のコミックで扱うテーマはどう決めたのですか。

綿村 児童相談所の職員、施設に勤めたことがある人、これから就職する人などたくさんの方にインタビューをしていろいろな情報を集めて、その話を一つのストーリーにしています。

家子 いろいろな人がテーマの決定に参加し

これは一例ですが、このようなことがいくつもいくつもあります。

家子 私もジレンマがあります。児童虐待の防止のためには、事後対応ではなく予防的に踏み込んだ取り組みが重要なのだとわかってはいるものの、どう踏み込むのかということろはずごくためらいがあります。行政は法制度の中でできることが決まっていますし、予算の制限もあります。一市民としてはいろいろやれるとよいと思う気持ちもある一方で、先ほどのお話にあった押し付けてしまうこととのせめぎ合いが生じるわけですが、では未来への次の一歩はどうしようか、ということなんでしょうね。

齋さんのお話にあったゲームをしてくれるお兄ちゃんのような市民の方は、その人なりの好意でしてくれているわけですよね。

家子 その好意を否定はしなくても、好意があれば何をしてよいとは限らない、ということになるんでしょうか。

齋 良かれと思ってやったことが相手のトラウマになることも当然あります。そういう意味ではトラウマ・インフォームド・ケアについては、少なくとも子どもに関わる人であれば誰もが知っておきたいことです。ボランティアでも仕事としてでも、子どもに関わる人たちなら学校の教員も含めてみんな知っておくべきことだと思うのですが、先日80人くらいの講演会場で聞いたら1人も知っている人がいませんでした。そのような現状ですから、これも含めてまだまだやっていかないと

ているのがいいですね。社会に伝えたいことを研究者が決めるのではなくて。

綿村 できたものを見てもらって、「これでいいと思いますか」とフィードバックしながらやっていけるので、少なくとも私の独りよがりにはなっていないと思っています。生活動線の中で知識仲介をしていくことをしていきたいですね。

齋 CiOCを受けた方の中に、たまたまコンビニのオーナーさんがいらっしました。深夜に1人で来る未就学くらいの子がいたり、万引きする中学生がいたりして、ただそういう子たちと話す、家庭環境にいろいろあったりするのがわかってきて、万引きくらいしようにないのを感じてしまう。けれど、一市民として何ができるんだろうという

いけない基礎的なことがたくさんあります。

市民としての関わり方

綿村 無関心な人たちに関心を持ってもらう気持ちの掘り起こしがすごく難しい。

齋 もともと少しでも関心を持つている人だったから何らかの働きかけをすることができるかもしれないし、ちょっと難しいレクチャーにしても受け入れてくれるかもしれないが、無関心な人にはそのアプローチでは難しい。正しいことをまじめに伝えても受け取ってくれないので、正しいことをいかに面白くカジュアルにやっていくのかという意味では、まさにコミックであったり、生活動線の中でそういうことに少しでも気付ける機会をどう作っていくかということころは、すごく大事な部分だと思っています。

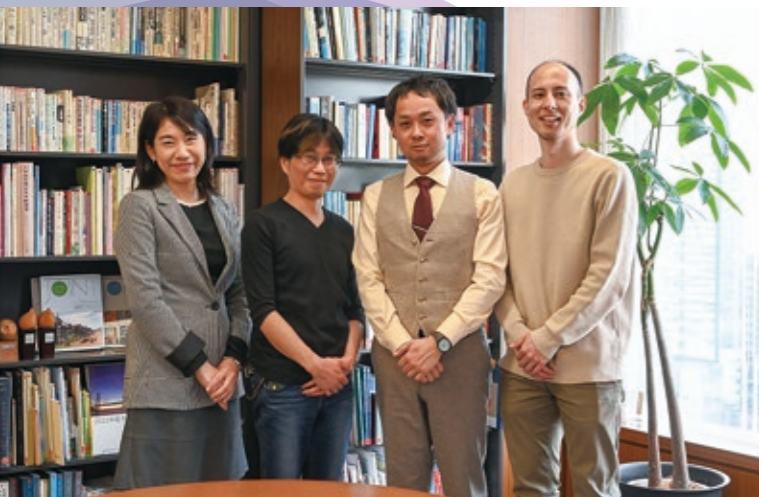
綿村 ひよつとしたらコミックが参考になるかもしれないので、できあがったら見ていただきたいのですが、まさに普通の市民が虐待通告をするときのタイミングについてレクチャーしています。さきほどのお話にあったように、好意でどうしたの？と聞いてしまうと、実は記憶の変容や誘導が起こるということを解説しています。

齋 たとえば性虐待については、何度も同じことを聞かれてしまうことでさらなる傷を生んでしまいかねないというのは、専門職の中では当たり前の理解ですが、市民のレベルではなかなかそういうことまではわかりませんよね。虐待の話をご自分で聞くかもそうですね。

想いでCiOCに参加してくださったのですが、その方が結局行き着いたのは、コンビニの一角を子どもたちが遊べる場所にするということでした。敷地の広いコンビニなのでもともとイトインスペースが広いのですが、そこにボードゲームを置いてみたら子どもたちがたまり始めて、テスト期間になると勉強する子なども出てきたそうです。

そうすると、従業員やお客さんとして来る町の人たちが子どもたちに声をかけたり始める。「勉強してんのか、頑張れ」とか、「ゲーム一緒にやるか」という感じで繋がりが生まれるそうです。子どもたちからしたら、視野の端っこに町の大人たちが入ってきて、またあのおっちゃんがいるなといったことだったり、大人の方も今までは特別な関心もなかった子どもたちの姿がちょっと目に入ってきてという変化が起きているそうです。

あくまでもその人は市民としてという部分を大事にしながらですが、子どもたちとの他愛もない会話の中で、ちょっと気になったことがあったときには声をかけたりするようなことを自分のできる範囲でやっているそうです。先ほどの保護司の方の話もそうですが、そういう人たちが、少しずつそんな眼差しを持っていく世界が広がっていくのかなと思います。いわゆる正攻法でアウトリーチしていくというのにも限界がありますし、既に居場所になつてるところや生活動線にあるところに、そういう知識や眼差しのようなものが散りばめられていくのが理想的ですね。



私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

今号では研究助成プログラムから松山聖央さん、国際助成プログラムから山本博之さん、国内助成プログラムから谷茂則さんにご寄稿いただきました。



2021年度研究助成プログラム
「助成題目」ヒトとモノの承認関係を手がかりとする「自宅」環境の包括的研究——環境美学、建築・都市計画論、芸術実践の融合的アプローチから

ヒトとモノの「つながり」としての承認をめぐる

●松山聖央（岡山県立大学デザイン学部准教授）

「承認」概念の拡張

「承認」という概念は、現代社会においてますます重要になってきています。多文化、ジェンダー、格差などの課題の中心には、社会や集団のなかで個としての人間が存在することをいかにしてみとめるかという問いが横たわっています。人間どうしの関係を考えるにあたって欠かせないこの「承認」を、人間と自然、さらには人間と事物一般、すなわちヒトとモノの関係にまで拡張してとらえ直してみようという試みが本研究の目指すところです。

もしかすると、「つながり」というキーワードから「ヒトとモノ」の関係を連想するのは

唐突に聞こえるかもしれませんが。しかし、約4年前、未知のウイルスによって「ヒトとヒト」との関係が絶たれ、外出すらままならなくなつたとき、私たちに残されたのは「自宅」という最小限の空間とそこにあるモノたちとの関係でした。それは、コロナ禍という特殊な状況において前景化した関係ではあつたものの、それ以前から、そして今後も、私たちの生の基点となり終着点にもなる環境／関係であり、モノとのよりよい「つながり」は個々人の生の質を向上させると考えられます。

非人間的な存在を承認することは可能か？

こうした発想のヒントになったのは、ドイ

用者の観点による議論が活性化するとともに、身近な環境や経験を考える際、研究者自らが当事者として現象学的な記述から出発することが不可欠と考えられています。本研究はそうした最新の動向とも呼応する特徴を有していると言えるでしょう。

二つの展覧会——

ひとつのゴールとして、新たな出発点として

本研究では、純粹に哲学的な文献研究や、データの収集・分析による実証的手法ではなく、芸術実践者や一般の生活者とのコラボをうけて、いわば発見的に「ヒトとモノ」の承認関係を探る手法を選択しました。その一環として、学会発表や論文だけではなく、展覧会というかたちでの成果発表を行いました。

当初より予定していたのが、2023年

9月に実施した「Zu Hause 自宅と承認」展です。ここでは、プロジェクト期間のなかでワークショップを実施したふなだかよさんと松井沙都子さんに加え、岸裕真さんと民佐穂さんという4人のアーティスト、さらに古道具屋Hou店主の伊藤慎吾さんの5名による作品やインスタレーションを紹介しました。たとえばふなださんによる写真の《III》シリーズでは、娘の乳児期に使用した育児グッズが主題化され、道具としての役目を終えたモノに、私たちがそれでも抱かずにいられない感情があることに気づかされます。カタログの論考にて研究メンバーの青田麻未が論じたように、モノはそれをつうじて関わった誰かへの「愛」の具現化でもあり、展覧会に先駆けて開催したワークショップの参加者とのディスカッションでも、そうした経験を共有するこ

とができました。

学術的にも、近年、制作者や設計者の側に

立った作品論・様式論ではなく、行為者や使

もうひとつ、スピノフのようなかたちで実現したのが、2023年5〜7月に実施した「モノの棲み家、ヒトの棲み家——中田静さんの自宅より」展です。9月の成果展の会場選定の途上で、私の所属先である武庫川女子大学附属総合ミュージアムの所蔵資料に出遭ったことから、ミュージアムとの共同企画が立ち上がりました。昭和から平成の時代にかけて、大阪の長屋に暮らした中田静さんというひとりの女性が残した生活用品を、亡くなったときの状態ほぼそのままに受け入れたというこのユニークなコレクションは、時代背景を知る貴重な資料であるだけでなく、蒐集とアーカイブ、剰余や不要、記憶や家族といった切り口で自宅におけるヒトとモノの

関係を語る恰好の事例であったといえます。アーティストによる試みや静さんの生活スタイルは、たしかにある個別の特殊なケースであり、統計的に普遍化し、あるいは多くの人にとって有用な指針としてただちに社会実装できるようなタイプの知識や方法ではありません。またこれらの展覧会は、研究メンバーである私たちにとつても、これまでの活動の、あくまでも暫定的なゴールです。しかしそれは同時に、従来の学術的な方法論では辿り着けなかつた発想や、来場者の反応や対話を契機として、新たな問題意識や関心に取り組むための出発点でもあります。現在（2024年2月時点）編集中の展覧会カタログで成果を総括するとともに、研究活動のさらなる展開を図っていきたいと思えます。



①「Zu Hause 自宅と承認」展会場風景。デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）にて、2023年9月9日～17日に開催。②ふなだかよさんの《fall》シリーズにもづくワークショップの様子。③「モノの棲み家、ヒトの棲み家」展会場風景。武庫川女子大学附属総合ミュージアムにて、2023年5月31日～7月12日に開催。



① 山本博之（京都大学）

作品制作を通じて 国境を越えた相互理解を図る

わかりやすさは時に先入観を増幅する

東南アジア最長の川であるメコン川は、中国南部に源流を発生し、東南アジア五か国を流れて南シナ海に流れ込む国際河川です。四二〇〇キロメートルに及ぶ流域の生態系や人びとの暮らしはメコン川とともにあり、その流域社会は国境を越えた運命共同体であると言えます。

地球環境の変化や経済開発などにより、流域社会の人びとは生活環境の変化への対応を余儀なくされています。しかし流域社会が複数の国に分かれていることもあり、流域社会の人びとが直面している課題には十分に関心が向けられてきませんでした。

近年の情報通信技術の発達はめざましく、ほぼ即時に、双方向で、映像と音声を容易にやり取りできるようになり、また、大がかりな設備がなくても個人が情報を世界に発信できるようになりました。このことは、直接訪れることができない土地の人びとのことを現実味をもって見聞きできるようなにした一方

で、見た目のわかりやすさが求められ、その結果として他者に対する先入観を増幅することにもなりかねません。それは外国のことに限らず、同じ国内でも、たとえば都市部と地方の間でも起こりうることです。

メコン川流域三か国によるプロジェクト

このプロジェクトでは、メコン川流域のカンボジア、ラオス、タイの三か国を対象に、文学、映像・写真、地域開発をそれぞれ専門とする三人のチームを国ごとに作り、三チームが合同で三か国を訪問する巡回ワークショップを行いました。

一般に隣国どうしはライバル意識を抱くことがあるし、都市部と地方の間には考え方の違いがあることを踏まえて、国境を越えて、そして都市部と地方の隔たりを越えて、現場で実際に何が起きているか、そしてそこに暮らす人たちがそのことをどう考えているかを知ることが目的の一つです。現場を訪れて二日間のワークショップを行い、そこで暮らす人びとと交流することで、先進諸国や都市

との講習を行いました。プロジェクトメンバーは作品制作へのアドバイスを通じてワークショップ参加者の考えを理解し、自分たちもそれぞれ作品を作ります。ワークショップは、地元の参加者が情報発信について講習を受ける機会であるとともに、プロジェクトメンバーが現場で見聞きしたことを映像・写真と言葉の組み合わせで表現して互いに共有する機会でもありました。

プロジェクト期間の終了後にも何らかの形で関係が続くように考えていくつかのことを試みました。その一つは、カンボジア、ラオス、タイを研究する地域研究者をメンバーに加えたことです。地域研究者は、研究対象地域に長期滞在して現地語を身につけて研究を行い、研究人生の長い期間にわたって研究対象地域との関わりを続けます。人文社会系の地域研究者が加わることで、プロジェクト終



③



②



④

①カンボジア、ラオス、タイのメンバーがそれぞれの言葉で作品を紹介した。②撮影についての技術講習を受けた後、野外に出て探索しながら風景を切り取り思索を巡らせた。③野外で見たり考えたりしたことを、絵、写真、動画で表現して他の人たちと共有した。④作品発表会では同じものを見て人によって見方や感じ方が違うことを知るとともに、互いの表現の工夫を学びあった。



メコン川には「水中の仏塔」が浮かび、人びとは舟で参拝する。メコン川は人の行き来や物のやり取りだけでなく精神的なつながりも支えている。

部の観点からイメージされる「わかりやすい」説明とは異なる現実があることを実感することがねらいです。

カンボジア、ラオス、タイの三か国は、互いに隣接し、社会的にも文化的にも共通点が多いため、訪問すると共通点が多く目が向き、共通点のため親近感を抱くと考えがちです。しかし、親近感を生むのは景観や生活の共通点ではなく、それらを見てどう感じるかが互いに理解できることだろうと思います。このことを体得するため、このプロジェクトでは訪問先で地元の人びとを交えたワークショップを行いました。

ワークショップでは、プロジェクトメンバーが講師役をつとめ、地域事情について解説した上で、景観を写真や映像で切り取るのと、感じたことを詩や歌にして表現するこ

了後も何年にもわたってメンバー間の関係が続くことが期待されます。

もう一つは現地語を使ったことです。プロジェクトメンバーには英語での意思疎通に問題がない人も多くいましたが、日本語を含めた四言語の通訳を入れて、どの参加者も自分が日常的に使っている言葉で話せるようにしました。費用も時間もかかりませんが、地元の人たちに自発的に考えを話してもらうためには日常的に使っている言葉で話せる場を作ることが不可欠だと思います。

プロジェクトが大きく羽ばたくことを期待

プロジェクトの成果として、映像・写真と詩・歌を組み合わせた作品の制作を考えていましたが、分野ごとに作った方が広い範囲の人びとに届けることができるというメンバーの意見があり、映像と詩・歌の作品をそれぞれ作り、各メンバーのネットワークを通じて発信してもらうことにしました。

プロジェクト終了後、三か国のメンバーが日本を訪れて同様のワークショップを行うことを計画しています。このプロジェクトは、社会的・文化的な共通性がありながらも相互理解を深める余地がある三か国をメコン川流域社会という枠組で括ることで交流して理解を深めるというものでした。その発想をさらに進めれば、たとえば海を共有する海域社会でも同様のことが考えられるかもしれません。東南アジアでの経験を東アジアにも広げ、このプロジェクトをさらに発展させる一歩になるものと期待しています。



陽楽の森で生み出される 新たな価値と世界的潮流

●谷茂則（一般社団法人和森林管理協会理事）

チャイムの鳴る森の予期せぬ成功

陽楽の森。奈良県北葛城郡王寺町畠田2丁目84番1。小字を陽楽という。昭和30年代にクスノキやテラダ松の早生樹を実験的に植林した約5haの都市近郊林で、私は、かつてその森を生コンの裏山と呼んだ。近隣にはローカル線の駅があり、県道にも面するその森だが、社会的な利用用途を失い、ササが人の行く手を阻む誰も入らない真つ暗な森だった。当時、家業の財務基盤整備を担っていた私は、その森を最優先の処分対象資産として、売却先が見つかることを心待ちにした。しかし、その森の引取手は現れることはなかった。

私の家業は奈良県内に広域にわたって所有する森林での林業だ。財務基盤を整えた後、ライフワークとなる林業事業に本格的に挑戦することを決意した。林業事業の中核は、奈良県南部の吉野林業地域だが、険阻な地形の吉野地域での林業挑戦はあまりにも

無謀だと考え、地形もなだらかな生コンの裏山を挑戦の最初の実習地を選んだ。実習では林業用の作業道を開設した。

道が通り自動車を通えるようになったことで森林の整備が一気に進んだ。真つ暗だった森には、明るい陽が射し込むようになり、陽楽の森という名前がピッタリな森になった。森を見ながら、「この森が私の林業ライフの拠点になるかもしれない」と思った。「木材生産を主目的にする林業とは違う観点から森林に価値を生み出す新しい森林利用や林業の形態があるのではないかと考えた。

とはいえ、自分だけでは何もできない。私は、手当たり次第に情報を集め、いろいろな人に出会いにいった。近隣のカフェオーナーと出合い「この森で大きなフェスしませんか」と提案をもらった。フェスは「休日裏山フェスティバルチャイムの鳴る森（以下、チャイ森）」と名付けられ、森はアートや音楽などで彩られた。結果はイノベーターイブなどもあった。二日間で五千人の人が森林を訪れ

とは、おのずとそれらの目標の達成につながる。

植物資源依存型社会実現のために

植物資源の多くが存在する森林を活かせるプラットホームづくりが、その実現の鍵になる。森林や森林資源をいかに日常生活の中に組み込めるかが、その成否を決める。日々の実践にいかにか落とし込むかが重要だ。連続講座とセットで行っていた陽楽の森林整備からは、森林整備団体「みんなでつくる」が生まれ、講座で学んだ土中環境の改善を実践すべく「大地の再生ワークショップ」を定期開催することとなった。小さな環境再生を楽しく充実感をもって実践し、参加者同士のコミュニティの新たな広がりや深化にもつながっている。

昨秋、陽楽の森は環境省の自然共生サイトに認定された。2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として保全する国際的な目標達成のために国が認定するサイ

た。森の新しい価値の一端をかいま見た。その頃から森は、陽楽の森と呼ばれるようになった。

陽楽の森で動き出したさまざまな活動

チャイ森をきっかけに陽楽の森では、森林に新しい価値を創り出す活動が次々と始まった。障害者就労支援や放課後デイケアの福祉の活動が始まり、森林空間は日常的に利用されるようになった。森の産物である木材を経済価値化するために始めた薪ストーブや薪ボイラーの販売は、福祉と林業の協働の活動として薪の製造・販売が始まるに至った。多くの活動が始まり、活動主体になる関係者も増え、そのつながりから生まれる活動も出てくるようになった。そんな頃、トヨタ財団の公募「新常态における新たな着想に基づく自治型社会の推進」「地域社会を支える共創によるプラットホームの創出や整備」のプロジェクトに出会った。町の片隅の社会的白地図のような森だからこそ集まった個性的な各活動のリーダーたちとゆるやかな統

トのことで、連続講座で、自然共生サイトの理想的な形が陽楽の森にあるとヒントを頂いたことが認定申請のきっかけになった。

トヨタ財団の事業を通して陽楽の森でのプロジェクトは、多くを学びステップアップさせてもらった。さらに、陽楽の森には、今年、奈良県地球温暖化推進センターに指定されたNPO法人の支所、地域の人が気軽に集える集客施設が開設される。大きな社会的潮流につながるテーマを日常活動に落とし込んだ日々を地域の生活者と共有する基盤ができ、その実現に向けてさらなる日々を積み重ねることになる。かつて陽楽の森が生コンの裏山と呼ばれ売却すら考えられていたことを知る人はなく、その森林の活動が未来に大きな社会的潮流とつながるなど全く想像すらしなかった。不思議な巡り合わせを感じながら毎日がカーニバルのような喧嘩の日々を送っている。



「休日裏山フェスティバルチャイムの鳴る森」の一コマ

合組織「チームめだか」を結成し、応募した。

私が林業家の傍流の価値づくりで始めた活動は、福祉やサービス業、行政、企業など他の領域の関係者との連携を生み出し、多様な活動や数々の関係者を生み出した。「森から生みだされる新たな活動やつながり」は何か新たな社会的価値を創り出すのではないか。それは、何なのか。森林所有者としての新たな存在意義がそこにあるのではないかと考えた。

トヨタ財団の事業では、鳥取大学の社会学者・家中茂先生の知見やつながりをベースに連続講座「陽楽の森から考える新常态（ニューノーマル）の輪郭」を開催した。講座の冒頭、愛媛大学の泉英二先生から二十一世紀を「化石燃料に依存しない植物資源依存型社会の実現をしなければならない」という提言があった。最近SDGsや脱炭素社会の実現、生物多様性の重要性などの世界的目標が主要メディアで騒がれる。植物資源依存型社会の実現を森林林業関係者が実現させるこ



陽楽の森におけるさまざまな活動の一端。①野菜を栽培し王寺町役場で販売。②森林の空間利用による放課後デイケアの取り組み。③王寺町の達磨寺活性化プロジェクトにおいて青春事務所がデザインした達磨寺のグッズ・ダルココロ作り。④アートカンパニー「なないろサーカス団」が割った薪で焼いたピザ。陽楽の森のふもとにある「KUBERU」と協力して地域食堂を展開。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」

個人研究

助成番号	題目 代表者氏名 代表者所属	助成金額 (万円)
D23-ST-0007	マルチモーダルデータを用いた、トランスフォーマーベースの疾患予測深層学習モデルによる 支配的因子の特定と臨床応用 高橋健吾 東北大学医学系研究科 博士課程2年	100
D23-ST-0034	ソーシャルメディア空間がもたらす“かかわりの全体性”の希薄化に関する研究 若林魁人 大阪大学社会技術共創研究センター 特任研究員	145

特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」

助成番号	題目 代表者氏名 代表者所属	助成金額 (万円)
D23-MG-0017	高度人材の「地方」選択に関する意思決定過程に基づく、高度人材の流入促進及び受入れ環境整備モデルの構築 結城恵 群馬大学大学教育・学生支援機構 教授	950
D23-MG-0021	外食産業を事例とする求職外国人と求人事業者のミスマッチ構造に関する調査研究ならびにその解消のための事業構築 井上泰弘 一般社団法人大阪外食産業協会 副会長	950
D23-MG-0030	豊田市発！産官学連携による在留外国人定住化に向けた多文化共生次世代育成 小林かおり 椋山女学園大学国際コミュニケーション学部 准教授	850
D23-MG-0034	外国人材の受入環境改善のための中小企業向け教材の開発と社会啓発 穴戸健一 一般社団法人 JP-MIRAI 事務局長代行・理事	950
D23-MG-0036	生成系AIを活用した「やさしい日本語」化ツールおよびその教育現場における効果的活用モデルの開発 中村孝一 NPO法人eboard 代表理事	900
D23-MG-0042	在日外国人経営者の経営実態の研究及び経営支援体制構築に向けてのモニター支援の実施・調査 渡貫諒 一般社団法人日本産業イノベーション研究所 代表理事	900

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」・「外国人材の受け入れと日本社会」

2023年度プロジェクト一覧

2023年度に採択された特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」7件、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」6件のプロジェクト一覧です。

※掲載内容は2024年3月21日時点の情報です。各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」

共同研究

助成番号	題目 代表者氏名 代表者所属	助成金額 (万円)
D23-ST-0006	脳と自由 —— 神経科学技術におけるプライバシー保護 宮下紘 中央大学総合政策学部 教授	760
D23-ST-0012	生成AIの社会的受容性を生じさせる要因とその文化差の解明 村山太一 大阪大学産業科学研究所産業科学AIセンター 特任助教	700
D23-ST-0022	スマートテクノロジーの実装に向けたデータコモンズの構想 —— 高齢者向けスマートホームにおけるビッグデータ活用のしくみと課題 松村一志 成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科 専任講師	620
D23-ST-0031	メタバースの社会心理学 —— エージェントと人とのインタラクションを通じた社会的関係の構築プロセスとリスク 小池真由 東京工業大学工学院経営工学系 助教	920
D23-ST-0040	マルチステークホルダーを有する課題解決・法制度設計の意思決定における、ブロックチェーン・DAO等の有用性と妥当性等の検証 本嶋孔太郎 RULEMAKERS DAO コミュニティマネージャー 森・濱田松本法律事務所東京オフィス 弁護士	755

私 は、これまで障害のある人と創作表現活動（アート活動）に関する研究をしてきました。主にアート作品に関しての解釈というより、そこに関与する人たち、障害のある人たちだけではなく、アーティストや施設のスタッフなどの生の領域に、活動がどのように接続するのかについて関心を持ってきました。つまり、作品を制作すること、舞台に立つこと、それらに至る／そして、その後も含めたプロセスの中で、個人の人生に関わる関係性やコミュニケーションが現れることに着目しています。私自身、そのような現場を外から眺めるといふより、積極的に参与し、共に行為をしながら研究するスタイルを重要にしてみました。私が専門とする教育人類学（文化人類学）においては、フィールドワークという研究方法をとりませんが、「自らの身体を持って出来事に経験的に立ち会う」ことで、その中でマクロな制度や理論におさまらない、生身の生の「多様性」を享受し記述していくことが大事であると考えています。

も ともと私自身が障害にかかわる現場にフィールドワークを始めたのは、自分自身の経験、障害のある家族をもつものとしての経験があります。7歳の離れた妹は生まれつき知的な障害をもって生まれてきました。当時、小学生の私にとって、妹の誕生は大変嬉しかった出来事であったのですが、学齢が上がることもにその存在を徐々に同級生に隠していった記憶があります。現在から振り返ると、他の人（自分自身）と異なるものへの感情や態度について非常に狭いものであったと感じると同時に、学

きが多くあります。言うに及ばず、「多様性」は、現在の社会を語る上での非常に重要なキーワードとなっています。

私の参与するアート活動の現場においても「多様性」というような表象をされることも見受けられます。一方で、障害等、さまざまな属性の人たちが参加している多様性と捉えてしまうことは少し注意しないといけないと感じています。社会制度的に定められたカテゴリーを前提として捉えてしまうことは、そもそも社会の用意した他者性を押し付けてしまうことにも繋がりがかねないと思うからです。一方で現場においては、共に表現をしてみたり、歩いたり、食事をしたりするような日常的な行為を通じて、身体やもの見かたといった異なるのが現れます。アート活動に限らず、人と人が知り合う過程は、診断名や障害といったものが始めにあるのではなく、個人同士の顔の見える関係が前提となっています。

アート活動というと、展示会や舞台に現れてくる作品が目が向かいがちですが、日常的な相互行為の束が制作の過程にはあり、そのプロセスに異なるもの同士が関係を紡いでいく豊かな領域であると考えています。アートは非日常的な領域に位置づけられますが、それゆえの日常の規範などを括弧に入れた実験性を持ったものです。私の調査する演劇のフィールドにおいては、「コミュニケーションの実験」ということが語られることが何度かありました。そのような意味で、異なるもの同士の新たな関係を探求する「媒介」としてのアート活動という側面が見出されます。

私のまなざし 39

アート活動を通じて 顔の見える関係を紡ぐ

文・写真 ● 宮本 聡
九州大学大学院人間環境学研究院



NPOのアート実践への参与



ともに歩くこと



鑑賞支援としての舞台字幕の実践



特別支援学校でのアートワークショップ

校生活の中で特定の方向へと形成されていく能力や発達に関する観念、障害への子ども世界における言説などが、その感情の背景にはあったと思ひ返されます。

妹の存在を周りに話すことができたのは大学時代でしたが、そこでの学問との出会い、専門とする教育人類学との出会いが自己を省察する上で大きいものでした。教育人類学は、異なる文化や文化的他者の世界をフィールドにし、特に教育や学習という切り口で、フィールドワークに基づき、その多様なありかたを探求する分野となっています。人類学の文化的他者への態度として大事にされていることとして、世界には多様な生きかた（見かた、聞きかた、感じかた）があり、それぞれに優劣はなく、異なる生き方を尊重していくことが挙げられます。

このような相対的な態度は、ある種の理解不可能性をめぐる議論などもありますが、異なりに関しての違和感をモヤモヤと抱えていた当時の私にとってはエンパワメント的であり、新たな視点を開くものでした。そのような学問との出会いから、社会の中で生きづらさや困難さなど抱える人々（文化的・身体的な他者）の文化的な実践の現場を「学びの場」として捉え、フィールドワークを行いながら研究活動を行っています。

障 害のある人たちとアート活動の現場においては、さまざまな人たちの協働によって成立していますが、そのような現場において「多様性」という言葉を改めて考えさせられると

現 在、私はトヨタ財団より研究助成を受け、新設される特別支援学校やその周辺地域に関わるプロジェクトを進めています。国際的なインクルーシブ教育の動向を受け、日本においても「ともに学ぶ」というインクルーシブ教育システムの構築が推進されています。

一方で、昨今の国連障害者権利委員会による勧告にみられるように、日本の特別支援教育制度において障害のある児童生徒を「わける」構造があると批判されています。「わけない／わける」「通常の学校／特別支援学校」というような教育制度をめぐる二元論的な議論が展開されていますが、子どもの生活は学校だけで成立しているわけではなく、より多元論的により広い領域、たとえばそれぞれの生活の基盤である地域社会を巻き込んで考えていく必要があると考えています。そのようなことを背景として、障害のあるなしに関わらず地域社会の人たちや子どもたちがアート活動を媒介にし、時間をともにするプロジェクトを進めています。

とてもミクロな試みかもしれませんが、顔が見える関係で出会い、言語・非言語的に何かを一緒に行いながら、お互いが知り合う場をつくっていく、そのことが多様な人たちが共存する地域の醸成に繋がればと考えています。

● 宮本 聡（みやもと 聡）
2019年度研究助成プログラム助成対象者。助成題目「地域コミュニティに開かれた特別支援学校」についての学際的研究——ローカルな学習文化資源を活かしたラボラトリー・スクール構想——

【アイスブレイキングの流れ 1】



【1】じゃんけん
 [1]-1: 「じゃんけん」を知らない外国人住民の方にルールを教える
 [1]-2: 納谷さんとのじゃんけんで、(後出しで)「あいこにする」「わざと勝つ」「わざと負ける」



【2】他の参加者とぶつからないように空間を埋めながら歩く

納谷さんからの掛け声に合わせて決められた動作を以下4つのステップに移しながら行う

[2]-1: 「Go」→歩く、「STOP」→止まる

[2]-2: 「Go」→止まる、「STOP」→歩く

[2]-3: 「CLAP」→手をたたき、「JUMP」→その場でジャンプする、の2つが追加

[2]-4: 「CLAP」→その場でジャンプする、「JUMP」→手をたたき、入れ替わる

[1]-2、[2]-2~[2]-4は、右脳と左脳を使うアイスブレイキングという解説があり、「直感的に判断していることを敢えて一回考えて違う行動としてアウトプットする」というところに参加者の皆さんが戸惑ったり思わず苦笑いして行動を変えてみたり、といった様子が窺えました。



日本人と外国人の住民が出会う場所

今回お邪魔したのは、これまでに3回開催され今回が一区切りの第4回となる「演劇ワークショップ」。「みんなで作る多文化えんげきワークショップ」Edetsu」です。当日は現地の方からすると暖かいと言える1桁後半の温度の中、最寄り駅である野幌駅からバスで開催場所となる「アンモナイトレストラン野幌店」に向かいます。本店は20代後半のパキスタン人の店長さんが営んでいますが、本プロジェクトに関心を寄せてくださり、第4回のワークショップの会場提供の

対話を通じて自分たちに必要な共生策を考える機会を創出し、「住民コメント(パブリックコメント)の募集」「行政への提言」などにつなげていく計画を立てています。

活動地へおじゃまします! 北海道江別市を訪ねて
 しゃべって、演じて、近くなる
 —みんなで考える共生社会への基盤づくり

◎武藤良太(プログラムオフィサー)



会場となったアンモナイトレストラン野幌店

【訪問地】
 北海道江別市(アンモナイトレストラン野幌店)

【助成題目】
 演劇を通じて作り上げる! 当事者による当事者のための草の根共生政策

【助成対象】
 国内助成プログラム2022年度「2)地域における自治を推進するための基盤づくり」

【プロジェクトチーム名】
 SHAKE★HOKKAIDO

【代表者】
 平田末季



開催チラシは日本語表記と英語表記の2種類を準備

江別市は、北海道の県庁所在地である札幌市に隣接する人口12万人弱のまちで、農業・酪農に加えて製造業も盛んな特性や背景を持ちます。2010年代からは外国人の就労者の割合が増加し、近年の技能実習生の受入れも合わせ、現在は約900人の外国人住民が暮らしています。一方で、多くの地域に共通するように、日常生活を送る中で日本人と外国人、それぞれの住民の接点や交わりはごく限られており、今後の人口動向を見据えた際に共生社会の基盤づくりや相互の関係性づくりが非常に重要となります。

本プロジェクトチームの中心メンバー/組織の一つである「江別国際センター」では2018年度から日本語教室を開講していますが、多文化共生に向けた取り組みとしてはそれだけで完結・充足するわけではありません。そこで、本プロジェクトでは言語の壁を超えたコミュニケーションを可能にする「演劇ワークショップ」によるアイスブレイキングを入口とし、「草の根政策カフェ」の実施などを通じて当事者が

みならず、参加者には無料でチャイと3種類のナン(チーズガリックク、チョコ)も振舞っていただき、僕もちゃっかり? 存分に? ご馳走になりました。

このワークショップは、日常的に接点のない日本人と外国人の住民が出会う場、そして一緒に地域社会を支え、一緒に暮らしていくためにどういったことが大事であるかを考える機会づくりです。ワークショップの構成は、【STEP01】アイスブレイキング→【STEP02】劇団の寸劇を見る→【STEP03】グループに分かれて話し合っ→【STEP04】他のグループの話し合いの結果を聴く、という4段階の構成になっています。

参加者同士は言語の問題以前に、そもそも初対面の人同士がほとんどであるため、先ず参加者同士で打ち解ける仕掛けや工夫が重要とな

【アイスブレイキングの流れ 3】



【10】手裏剣を隣の人に回す(飛ばす→キャッチする→飛ばす→……の繰り返し)、どんどん速く

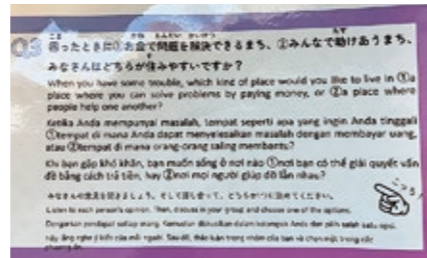
写真を撮り忘れるほど皆さんのアイスブレイキングに魅入ってしまいました。[9]-2では手をつかわず洋服を風呂敷代わりにして受け取る方がいたり、[10]では納谷さんからの激励に応じて最後は1周するのに3秒を切るタイム設定を見事にクリアしたり、全員でイメージを共有しての協同が見られました。

【11】4グループに分かれてペーパータワー製作(2回)

[10]までを踏まえて実際の協同作業がアイスブレイキングのトリを飾ります。まずは各グループでどうしたら高く積めるかを「紙を触らずに」=みんなでイメージをすり合わせながら、話し合う時間が取られました。その後ペーパータワー製作を行い、1回目の経験を基により高く積めるように再度話し合っ2回目にチャレンジする流れでした。4グループ何れも1回目より高く積み上がり(2グループは最後の最後で崩れてしまいましたが)、各グループともイメージをすり合わせた上で協力して取り組んでいらっしゃいました。

最後に、今回を含めた4回のワークショップの振り返りや今後に向

草の根での共生社会の基盤づくり



多言語で書かれたカード

ちらが住みやすいですか?」というトピックが記載されており、各グループで話し合った結論を最後に発表しました。今回はレストランの小上がり席で行ったため、その場で発表することが難しく、運営スタッフの他、劇団の方にも協力いただき、各グループの結論を聴き取り代理で発表する方式を採られていました。

最後の発表を聴きながら非常に興味深かったのが、カードには「(上記①) ちらが住みやすいですか?」というトピックが記載されており、各グループで話し合った結論を最後に発表しました。今回はレストランの小上がり席で行ったため、その場で発表することが難しく、運営スタッフの他、劇団の方にも協力いただき、各グループの結論を聴き取り代理で発表する方式を採られていました。

また、「劇団 ELEVENSIES」を主宰する納谷さんが、4月に札幌にオープンする劇場の芸術監督に就任することから、その劇場の活用などを含めて引き続きの協力関係を構築していくことや、今回の会場提供などに協力いただいたパキスタン人の店長さんとも、今後も規模は小さくともお店をお借りしてワークショップやイベントなどを開催していくことを相談中(前向きに検討いただいている)とのことでした。

各地域や日本社会が直面する人口減少や少子高齢化という大きな課題にも深く関わる多文化共生の取り組みにおいて、丁寧な対話とコミュニケーションから生まれる草の根での共生社会の基盤づくりがどのよう展開していくか、改めて現地をおうかがいできる機会も含めて楽しみにしています。

【アイスブレイキングの流れ 2】



【3】全員と自己紹介して、全員の名前を覚える

【4】挨拶した人と名前を交換し、5人以上と交換したら自分の名前(を持っている人)を探し出し、自分の名前を獲得できたら椅子に座る

[3][4]はディスコミュニケーションが起きていることを体感するアイスブレイキングで、[3]ではそれぞれの名前が正確に覚えられていなかったり発音できなかったり、[4]では何故か1人の名前を3人が持っていたり誰かの名前が行方不明になっていたり、カオスな状況を皆さん楽しんでいました。

【5】生まれ月(1月~12月)が一緒の人同士でグループに分かれる

【6】四季(春・夏・秋・冬)のうち好きな季節が一緒の人同士でグループに分かれる

【7】「犬が好き」or「猫が好き」、どちらが好きか一緒の人同士でグループに分かれる

【8】「愛は勝つ」or「愛は勝たない」、どう考えるかが一緒の人同士でグループに分かれる

[5]は事実に基づくもの、[6]~[8]は嗜好を問うもので、特に⑧は目に見えない事象をどう考えているか/どう向き合うか、という敢えて抽象度の高いお題が、ワークショップの[STEP 02]以降に向けた布石にもなっていました。

【9】青いボールがあるとイメージして隣の人に回す

【9】-1: 最初に回したボールから重くなる(1.5kgの仮定)

【9】-2: 重たいまま熱くなる

りませんが、そこを担っているのが札幌を拠点に活動している「劇団 ELEVENSIES」を主宰する納谷真大さんや劇団員の皆さんです。当日は、日本人10名、外国人8名(通訳役の方も含む)の参加者に劇団員3名が混ざり、非常にボリユーミーで楽しいアイスブレイキングが展開されました。(本記事に掲載した写真と共に、当日の様子をお感じいただければ幸いです)

アイスブレイキングの後は、劇団員3名による寸劇となりました。ここでは、ある曲をカラオケで熱唱してみんなで盛り上がりがあった……はずなのに、歌自体は「好き」「嫌い」「どちらでもない」という意見に割れたり、大雪で車がスタックしてしまい助けに来てもらった

友人たちも次々とスタックしてしまう状況下で「ナンを呼べばという提案に「お金で解決するのは嫌」「サービスを頼れば良い」という意見に割れたり、というこの後のグループディスカッションに向けたお題の頭出しがされました。

そして、参加者が4グループに分かれて、チャイと3種類のナンと一緒に食べ飲みしながら、本日のテーマである「みんなで江別で一緒に生活するためには何が必要か」に紐づくトピックが記載された3枚のカードを手元に話し合います(3枚目のカードのみ後から配布)。ディスカッションの出口となる3枚目のカードには「困ったときには①お金で問題を解決できるまち、②みんなで助けあうまち、みなさんほど



2024年度事業計画

トヨタ財団の本年度「事業計画」が決まりました。その概要をお知らせいたします。

当財団は、1974年の創設以来、生活の質の向上、自然環境の整備と保全、社会福祉の充実、教育・文化活動の振興などにつながる意欲的・創造的な研究や事業に対して、多彩な枠組みによる助成を実施してきました。本年度においてもそうした方針の下、昨年度と同様、「国内」「研究」「国際」の3つの助成プログラム、2つの特定課題（先端技術と共創する新たな人間社会」「外国人材の受け入れと日本社会）、「イニシアティブプログラム」という枠組みを設けるとともに、特に近年の重要課題である人口減少下での持続可能な社会の構築に寄与すべく、新たな特定課題「人口減少と日本社会」を設け、人々のより一層の幸せの実現に向けた助成事業を展開していきます。

新型コロナウイルス感染症拡大以降、特に注力してきたITなどの新しい産業技術の適切な社会実装による人々の「つながり」や「交流」のあるべき姿の構想と具

体化についても、引き続きすべてのプログラムにおいて重点を置いて助成を実施します。あわせてそこから得られる知見を最大化すべく、関係組織や機関との共有・連携をさらに強化して、その成果を社会に届けることに努めていきます。また、本年当財団が設立50周年を迎えるにあたって、その記念事業についてもあわせて進めていきます。

特定課題

先端技術と共創する新たな人間社会

基本テーマを継続し、助成対象にかかわる枠組みも共同研究プロジェクトと個人研究プロジェクトの2本立てとする。

●募集概要

先端技術と共創する新たな人間社会

【募集時期】

2024年9月～11月(予定)

【助成予定金額】

総額4000万円

- ・共同研究プロジェクト…3500万円程度
- ・個人研究プロジェクト…500万円程度
- ・100～200万円程度/件

【助成期間】

2025年5月から最長3年間(1年、2年または3年間)

外国人材の受け入れと日本社会

基本テーマを継続する。ただし、日本国外居住者を代表とする応募も受け付ける。

●募集概要

【テーマ】

外国人材の受け入れと日本社会

【募集時期】

寄与するシステムの創出と人材の育成

②地域における自治を推進するための基盤づくり

【募集時期】

2024年4月～6月

【助成予定金額】

総額8000万円

- ①「日本社会」…総額4000万円程度「上限1500万円/件」
- ②「地域社会」…総額4000万円程度「上限600万円/件」

【助成期間】

①「日本社会」…2024年11月から3年間

②「地域社会」…2024年11月から2年間

研究助成プログラム

テーマ「つながりがデザインする未来の社会システム」のもと、引き続き「協働事業プログラム」と「共同研究プログラム」を実施する。

協働事業プログラム

東京大学未来ビジョン研究センター（I-FI）との協働により、若手研究者に対する安定した研究活動の場を提供し、その育成を支援する。

国内助成プログラム

「新常态における新たな着想に基づく自治型社会の推進」をテーマとした4期目の公募を行う。助成の枠組みなどは2023年度までを継承するが、日本国内(社会)を対象とした特定課題を新たに設けることに伴い、助成額を減額する。

そのため、「①日本社会」の枠組みでは1件あたりの上限額を減額する。併せて、企画内容においては、助成期間中に新たに2地域以上での実践・展開、および特定地域での既存の取り組みの分析・検証と他の地域に広げる戦略づくりの実施、以上2点を要件として設ける。

●募集概要

【テーマ】

新常态における新たな着想に基づく自治型社会の推進

【助成カテゴリ】

①日本における自治型社会の一層の推進に

人口減少と日本社会

人口減少や少子高齢化は息の長い取り組みや対応が必要な課題であることから、人口減少の緩和と人口減少下における日本社会のあり方を対象とする本助成プログラムを新たに立ち上げることとした。

本特定課題では、若者や次世代の人材を「未来の担い手」と捉え、彼/彼女らが主体性を発揮し、これまでのさまざまな対応・対策の効果や意義等をレビューし、それに基づいて人口減少の緩和、人口減少下における日本社会のサステナビリティに関して考える取り組みを支援する。

●募集概要

【テーマ】

人口減少と日本社会

【募集時期】

2024年9月～11月(予定)

【助成予定金額】

2024年9月～11月(予定)

【助成予定金額】

総額5000万円「500～1000万円程度/件」

度/件」

【助成期間】

2025年5月から2年間または3年間

●募集概要
 「テーマ」
 つながりがデザインする未来の社会システム

「助成予定金額」
 総額2000万円/年[主に人件費に充当]

「助成期間」
 2025年4月から2026年3月31日
 (進捗報告を受けたうえで単年度単位で助成を決定)

共同研究プログラム

学際性と研究参画者の多様性、国際性、そして研究成果の社会へのインパクトを重視し、社会システムの変革を促すような強い姿勢で社会課題に向き合うプロジェクトを募集する。

●募集概要
 「テーマ」
 つながりがデザインする未来の社会システム

「助成予定金額」
 総額5000万円[上限800万円程度/件]

「助成期間」
 2024年4月～6月

「募集時期」
 2024年11月から2年間

国際助成プログラム

2022年度に対象地域に加えた南アジア諸国も含め、基本テーマと趣旨を継続して、助成プログラムを実施する。

本年度は、設立50周年記念国際シンポジウムを日本とASEANの関係を重点的に扱う機会と捉え、これまでの国際助成プログラム助成対象者を招き、発信とネットワーキングを行う。

●募集概要
 「テーマ」

アジアの共通課題と相互交流——学びあいから共感へ——

「対象国」*
 東アジア・東南アジア・南アジアの国・地域

「対象プロジェクト」
 対象国の2国以上が関わるアジアの共通課題について、学びあいによる相互理解を深め、レビュー及び提言や作品の制作を行うもの

「必須となる活動」
 学びあいの手法として、他国の現場訪問・相互交流

「募集時期」
 2024年4月～6月

「助成予定金額」
 総額7000万円

・1年プロジェクト[上限500万円/件]
 ・2年プロジェクト[上限1000万円/件]

「助成期間」
 2024年11月から1年または2年間

イニシアティブプログラム

本年度も引き続き、トヨタ財団として支援の意義が大きい、主体的・能動的に取り組むべきと考えるプロジェクトを積極的に発掘していく。また、過去に助成したプロジェクトの成果や手法などをインパクトのある形で社会に発信・普及させることを目的とするプロジェクトへの助成も行うとともに、シンポジウム開催による成果発信も行う。

●プログラム内容

「対象プロジェクト」

・民間財団として支援の意義の大きいプロジェクト
 ・公募プログラムにおけるモニタリングなどを通して、より大きな成果に結びつく財団として判断したプロジェクト

「助成予定金額」
 総額4000万円



トヨタ財団
 設立50周年
 記念事業

トヨタ財団は2024年10月15日に設立50周年を迎える。そこで、設立50周年記念事業として以下の事業を2024年度に実施する。

50周年特設サイト新設(50年史)

ウェブサイトに助成プログラムの変遷などをまとめたトヨタ財団50年の歴史や、助成プロジェクトのインタビュー記事、トヨタ財団の目指す未来への提言などを掲載していく。

国際シンポジウム開催

設立初期より現在に至るまで、トヨタ財団の国際的な助成事業の重要な対象地域である東南アジアと日本について焦点をあてたシンポジウムを開催する。

記念助成

設立50周年を記念し、人間は地球全体の一部であるという認識のもと、地球環境変化、国際情勢変化、技術革新、人口変動等

のさまざまな環境下での人間社会のあり方にフォーカスした研究プロジェクトへの助成を実施する。具体的な分野や領域は規定せずに、革新的で野心的なプロジェクトを幅広く募集する。

●募集概要

「テーマ」

50年後の人間社会を展望する

「助成カテゴリ」

①共同研究プロジェクト(2名以上で、代表者は45歳以下)
 ②個人研究プロジェクト(個人応募で40歳以下)

「募集時期」
 2024年10月～12月(予定)

「助成予定金額」
 総額7000万円

①共同研究プロジェクト…総額3000万円程度[1000万円/件]
 ②個人研究プロジェクト…総額3000万円程度[200万円/件]

「助成期間」
 2025年5月1日から1～2年間

2024年度春公募スタート

国際助成
 プログラム

「募集期間」
 4月1日⑤～6月1日⑤

研究助成
 プログラム

「募集期間」
 4月17日⑥～6月17日⑥

国内助成
 プログラム

「募集期間」
 4月8日⑦～6月11日⑦

*[対象国]

・東アジア：日本、中国、香港、マカオ、台湾、韓国、モンゴル
 ・東南アジア：ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、シンガポール、タイ、東ティモール、ベトナム
 ・南アジア：バングラデシュ、ブータン、インド、モルディブ、ネパール、パキスタン、スリランカ



50th Anniversary

公益財団法人トヨタ財団は2024年10月15日に設立50周年を迎えます。

それにともない、50周年記念特別サイトを作成いたしました。

本サイトでは1974年の設立から現在までのトヨタ財団の歴史や、

支えていただいた助成対象者をはじめとするさまざまな方々の声をお届けすると共に

50周年記念事業として開催するシンポジウムや

記念助成についての情報を掲載していきます。



公益財団法人 トヨタ財団50周年記念特別サイト
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/service/50th/>



出張中にクメール料理を教えていただく機会があり、伝統料理「アモック」を作りました。[Y.N.]

[編集後記]

LAST WORD

●「今年もしんどかった！」毎年恒例の花粉症との戦いがようやくピークを超えました。今年は暖冬も影響して花粉の飛散時期が早まったようで2月上旬頃から早くも症状は全開モードでした。実は北京に赴任していた3年間は全く症状が出ず「遂に克服した！」と喜んでいたら、日本に帰任するやいなやあつという間に元に戻ってしまいました(とつやら植生が違っただけのようです)。

経験されている方も多いと思いますが、当然のことながら症状が酷いときは仕事にも身が入らず業務効率は著しく低下してしまいます。某家電メーカーの推計によると、こうした効率低下による経済損失は、日本で1日あたり2000億円を超える試算されており、国や企業にとっても大きな問題です。また、ある有名サッカーチームでは、製薬会社と手を組んで、本格的な花粉症対策を実施しているところもあり、アスリートのパフォーマンス管理上も極めて重要な課題となっているようです。

とは言え、個人的に抜本的な対策を取るのなかなか大変です。私も病院に行って長時間待たされるのがイヤで、つい市販の薬で逃げ切ろうとしてしまいます。しかし、今年はさすがに我慢できず、病院へ行ってしっかり洗浄して処置して

らったところその後はかなり楽になりました。いずれにしても、毎年忙しい年度末にこうした問題が起これるのは本当に困りものすべて解決できるウルトラCの登場を期待せずにはいられません。花粉症と戦っている同志の皆様、何かよい方法ありませんか？[N.K.]

●『舟を編む』というドラマにはまっています。三浦しをん原作の、辞書作りに関わる人々を描いたベストセラーですが、その中で印象に残った場面があります。辞書編集部に異動してきた新人編集者と上司の編集者による「恋愛」の語釈をめぐるやり取りの一幕です。

●「舟を編む」というドラマにはまっています。三浦しをん原作の、辞書作りに関わる人々を描いたベストセラーですが、その中で印象に残った場面があります。辞書編集部に異動してきた新人編集者と上司の編集者による「恋愛」の語釈をめぐるやり取りの一幕です。

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。

JOINT [ジョイント] No.45

発行日 2024年4月12日
 発行人 山本晃宏
 編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
 新宿三井ビル37階
 [TEL] 03-3344-1701
 [FAX] 03-3342-6911
 [URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
 デザイン エディション・ヌース
 印刷 文唱堂印刷

●事業計画と本ページの左側でもお伝えしておりますが、おかげさまでトヨタ財団は今年50周年を迎え、特設サイトを開設いたしました。過去の対象者の方々にインタビューを行い、助成実施当時から現在の様子、また未来の展望をお話しいただくインタビューを掲載してまいります。第一弾は近日中にご覧いただけるよう現在鋭意編集中です。お楽しみにお待ちください。

先日はその取材で約20年ぶりにカンボジアの首都、プノンペンを訪れました。当時よりも高く近代的な建物が増え、日本にもある有名なコーヒーチェーン店があちこちにありましたが、トゥクトゥクはまだまだメインの移動手段でしたし、路上で食べ物や生活用品を売る屋台もたくさんあり、雄大なメコン川のように変わらない姿も見ることができました。[N.]

ジはきちんと届けられているだろうか。うまくなくともいい、まずは言葉にして伝える、話し合いながら思考を深め、言葉を洗練させていく——この努力を惜しまないことを心に留め、POとしての役割を見つめ直す機会となりました。[K.K.]

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>

